『國民新報』1939年8月13日

旱害の教訓　―災害に打克つ氣魄の養成―

　はのにりのをへてゐるであるがにはににはれて、くにはんとするだけにだされる。しのはである。かかるにしてこそ々はにもかれないいをすべきである。それはなるにもつなのだ。々は十二のをしよう。あれのさへ、のをす一にぎなかつたかに見える、あのこそのにましいものである。のにましいものである。

　やをとつてはならない。それはに々[の]祖先及び々ののにすべきである。に々はこのによくへて一のをし、は々ののためにびかゝるにひしがれぬ、、びのためのるをすべきである

　、のためにはにしたことはない。の々がくなりしてのしきをたにはによりをつであらう。にそのととさへあれば、ほんののにぎないことである。

　ればにき、らざればをく。たるであらう、ふしだらであらう。してか一や二のでれてふではになきことゝはねばならぬ。づ、らんとするの一をけることに雄々しくならう。やのにるきなしになるまい、とふのをひさう。をにすとふ。はくばののをしてのく々にのをするたらしめんことを。